

老 童 嬉 游

—— 良寛と子どもたちの交歓 ——

宮 坂 広 作
Kousaku MIYASAKA

1. テーマとモチーフ

筆者が初めて良寛の名に接したのは、いったい何歳の時のことだったのであろうか。教師や親からその名を聞いたとは思えない。

小学校の1～2年生を、山の分校の複式授業で過ごしたが、その学校の唯一の蔵書だった「講談社の絵本」の中の一冊であったか。しかし、そのほとんどは昔話や軍国美談だったから、良寛さんはそこにおさまりにくい。

3年生になって通学するようになった町の本校のすぐ傍に町立図書館があり、そこには児童用図書が開架式で並べられていたのが嬉しくて、放課後しばしば訪れて本を借り出したものだった。しかし、魅力的な書物がいっぱいあった中で、わざわざ良寛の本などに目が行ったのだろうか。

良寛についての知識といえば、越後——いちおう隣県というよしみはある——の坊さんで、子どもたちと日なが一日手まりなどして遊びくらし、やさしく大らかな人柄で、誰からも敬愛されたといった程度のものであった。中学や高校の国語の教科書に良寛の作品は収録されておらず、また、日本史の教科書にもその名は無かった。高校入試や大学入試に際して、かなり猛烈に受験勉強をやったのだが、良寛は受験学力と無縁な存在であった。

小学生のころ、良寛の行状について多少知るところがあったとしても、彼についてほとんど関心を持てなかったのである。そもそも、坊さんというのが不可解な対象であった。葬祭の折に、いっぽう変わった美々しい着物で登場し、何やら訳のわからない言葉で呪文のようなものを唱え、親達はこの上もない貴人をもてなすようにへりくだった対応をしている。いったい、これは何をやる人なのか。親達は、儀式の日以外にはべつにその人を讃える言辞を洩らさないのだが、彼はふだん何をしているのであろうか。

僧というのは、葬式や法事の時以外には接触のない、親しみなど持つべくもない、別世界の存在であった。良寛が威儀や体裁をつくろうことなく子どもたちと遊戯したと聞いて、やさしい人だとは思ったが、尊敬すべき対象とは思わなかった。だいいち、大の大人が昼日中子どもと遊び暮らして、どうやって食っていたのだらうと不審であった。小学校の高学年くらいになると、儀式に出席する僧侶にはお布施をさしあげるということを知った。その金額

が、農家であるわが家にとってかなりの負担であることも知った。良寛さんもお布施をもらっていたので裕福であり、子どもたちと遊んでいても食うに困らなかったのだろうと推測した。

筆者が生まれたのは満州事変勃発の1931（昭和6）年であり、それから15年間戦争が続いた。筆者の少年期はまさに軍国主義の時代であり、外国人の敵を殺りくする者が英雄としてもてはやされた。子どもと遊んで徒食している良寛など、一顧にだに値しない風潮であった。時代の子として、筆者も西住戦車隊長や加藤隼戦闘機隊長の軍功に胸を躍らせ、大きくなったら立派な軍人になり、天皇陛下のために生命を捧げようと決心していた。

事実、成人する前に戦局が悪化し、国家の存続さえも危ぶまれる状況になったので、親が必死になってとめるのをふり切って、海軍兵学校予科を志願しようとした。入学より敗戦の方が一足速くやってきたので、殉国の志も空しくなったのだが、戦後の社会にはなかなかなじめず、長い青春彷徨にさまようことになった。

その後、大学の教養学部教養学科という所を卒業し、「教養学士」という称号を得たのだが、筆者の読書の範囲には良寛が登場することなく、良寛についての知見といえば、少年期のべっ見による、いたって貧弱な内容のままにとどまっていた。こうした無学・無教養の状態で、還暦で大学を退職するときまで続いていたのであるから、恥じ入るしかない。その大学の教員は、それぞれの専門分野で日本の学問研究の先端にいることを要請されており、たとえ生意気な学生たちから「専門バカ」などと罵られようとも、かなり細分化された学問の狭隘な範囲で、日夜鎬を削らざるをえないという事情があった。

筆者のばあい、専門性を磨くのに障害になることをわきまえていても、専門外の書物の魅力に堪えかねて、「外道の読書」に誘惑されることがしばしばあったが、それにもかかわらず良寛はまったく圏外だったのであるから、愚鈍の質まことに救いがたしと言うしかない。

定年で地方大学に移ってから良寛の詩集を読み、その詩境のすばらしさに驚倒した。陶淵明の詩には既に中学生時代に接して、すっかりその虜になっていたのだから、当然良寛にその筋から接近してもおかしくなかった。しかし、良寛を少しでも理解できるようになるのには、こちらの年齢が高くなり、境遇も落莫たるものにならなければならないのであろう。もっとも、後述するように、小宮山量平は大方の日本人が老境に近づくのにつれて良寛への敬愛を深めたが、日本国の精神的土壌について批判的である。

筆者が良寛に魅せられるのは、良寛を敬愛する多くの人のばあいと同様、自然と人間に対する良寛の無我・純粹の愛情に感動してのことである。彼の内面には、彼の遺した詩歌をたよりに接近するほかないのであるが、歌の平明に比して、詩の方は佶屈であり、古典・経典を踏まえてつくられたものは解釈がむずかしい。文学にも仏教にも素養の無い筆者が良寛の深奥に迫ることなど、とうていできうべくもない。

拙稿が目ざしているのは、良寛を子どもに理解させるのは可能かという問題と、良寛が子

どもたちと好んで遊戯したのは何故かという問題について検討してみようとするのである。前者のために、良寛にかかわる児童書の数冊をとりあげて内容を調べ、後者のために何冊かの良寛注解書を参照してみたい。とくにわが師兄として敬愛する故北川省一氏の諸著を重視するつもりである。晩学にして浅学、一知半解にも達しないことはよく自覚している。ただ先学の驥尾に附して、良寛理解を少しでも深める機会とし、同好の士を増やすためのよすがとしたい。

良寛の生前、彼と親しむことで心洗われた人びとは、文化人と野人・民衆のあいだに少なからず、その没後、彼に魅せられ、彼を慕った人は、相馬御風・吉野秀雄など数多い。これらの巨星の業績に学んで、良寛遊戯の真情に少しでも接近したい。若き日の孤立・人間嫌い・絶望を克服して、里人たちと馴じみ、子どもたちのことを細かく心遣い、真剣につきあって、彼らに安らぎや愉しさをとどけた在野の仏法行者への追慕である。

2. 良寛に関する児童用読み物

児童用に書かれた良寛に関する書物は、かなりの数にのぼっている。⁽¹⁾子どもにとって良寛は親しみやすい相手であり、幼稚園のやさしい男性園長のイメージで受け入れることができよう。しかし、求道・悟得の宗教者としての彼を理解することは、子どもたちにとって無理である。ならば、「偉人」としての彼を、子どもの読み物はどのように描き出してきたのだろうか。管見の限りで、それらの書物を検討してみることにしたい。

(1) 戦前における児童読み物

1) 高野盛義 『少年良寛和尚の生涯』(大同館、1929年)。これは、まさに良寛傳である。出だしの所の文体は、つぎのようになっている。「黒いほど濃い、紺色の空には、天の川が白く、冷たい風に光を研ぎ、渺茫として暗い、日本海の孤島である佐渡の空に、高く慄へて、流れてゐる」。冒頭の部分であるから、とくに力を入れて叙述したのであろうが、ことばづかいがふるめかしく、センテンスは長くて読みにくい。総ルビで、「です、ます調」ではあるものの、小学校の高学年生にもかなりむずかしい文章と内容のように思われる。

さて、出家のいきさつとしては、罪人の斬首に立ち合い、死刑者を憐れみ、傷み、祈る心がこみあげたこと、代官と漁夫の争いの間に立って嘘をつけず、人の世に深い疑問と嫌悪とを感じたこと、それ故に現実の混濁の世から離れて、自己の完成へと精進すべく寺に入ったと書いている。栄蔵が少年時代、同輩の子らから「抜け蔵」と罵られ、からかわれ、いじめられていたこと、また名主見習となっても、名主の昼行燈と馬鹿にされたことが記されている。

こうした扱いに対して栄蔵が、怒るよりも自分の至らなさを思い、自己に鞭打って内省を深めていったと解している。嘘と虚構と偽瞞とはからいの多い世の中、そこに生きる人間の

頽廃を見て、救世・済民の志をつよく抱きながら、それを実行する力を持たぬ自己への苦悶から、出家の道をとらざるをえなかったという説明である。

乞食坊主たんとする決意については、寺院仏教・教権仏教が型式に陥り、生命を失っている状況を慨嘆し、衆生済度・自己救済を求めて寺を出た、というのである。それは、釈迦の本願を模そうとする生き方であり、修業のあり方だったとする。この著者の特色は、良寛が人を救う前に、まず自分自身の魂を救おうと願ったとしている点である。自然の中で、自由かつ孤独な修業によって悟道に達すれば、その人格に触れる人を救い、活かすことになるのだと著者は説明する。

越後帰還については、説明はしごくあっさりしている。乞食行脚の間、寂しさを感じる時、憶い出は越後出雲崎へと飛んでいったと書いている。兄弟たちと久しく会っていないが、どうしているだろうと思いつつ、「足はいつとなく、越後の方へ向かってゆくのでした」というのである。この説明では、帰国後の良寛が生家の前を通りすぎて、家族が彼の帰国を知ったのは、半年後のことだという話とはくいちがう。もともと、生家を訪れたものの、弟に名主役を押しつけて苦勞させているわが身の勝手さを思っ入ることもならず、立ち去ったという描写がある。

良寛と子どもたちの交遊の場面は、詳細に叙述されている。手まりや鬼事のほかに、子どもたちにせがまれて、月兎の嘶をしたとされる。話し終わると、子どもたちが兎をかわいそうに思って泣くのを、良寛が感心だと誉め、「それが情けぢや、慈悲ぢや。その心のまゝに大きくなったら、自分の身を殺してまでも、人に尽くすので……。」と諭したことになる。

ここでは、良寛は子どもたちに昔噺をつうじて教化する僧侶として描かれている。ただし、著者は序文で、「良寛は、仏教を、説くでなく」、人びと、子どもたちとの交流の中で彼らに春風のような暖かさを送ったのだと説明している。「理屈ばく、冷たく、厳しい、苦しい、耳に痛く響きがちな、人の道」を、人格を通して教えたのが良寛であり、習慣と惰性によって生き、純真・素朴・真正直・鮮新・驚異などの童心を忘れ去りがちな大人たち、物質文明の進歩の中で童心を失った文明病患者たちは、良寛によって目覚めるべきだと主張する。良寛の和歌や戒語を巻末に収録し、良寛の宗教者としての内面を努めて描こうとした、レベルの高い児童読み物である。

2) 大坪草二郎 『童話集 良寛さま』 (古今書院、1930年)

「童話集」と銘打っているだけに、全15章はすべて良寛の逸話で構成されている。⁽²⁾良寛の伝記のようなものはまったくなく、「冬籠り」と題する、五合庵の孤独で退屈な生活が書かれている第一章は、「鉢の子」という、良寛と子どもたちとの遊戯の様を描いている第二章へと続いている。文章は、「どんよりと曇った空は、まるで地面に押し被さるように垂れ下って、米の粉をふるい落とすように、粉雪が『サッ、サッ、サッ』と絶え間なく降っ

てくるのです」といった童話的文体で、用いている漢字はかなりむずかしい。しかし、総ルビになっている。

著者は「巻末記」で、良寛のような生活になりきれたらさぞよいだろうと思うことがあるけれども、自分にはそれができそうにもないと分かっているだけに、いっそう良寛の偉大さを感じさせられる、と記している。自分自身も子どもたちと遊ぶのは楽しいが、良寛のように童心の世界に没入し、無我の境に遊ぶことは不可能だとし、無心な子どもたちと遊んでいる時にさえ、醇化されない自分たちは不幸だと述懐している。

著者は良寛のことを、あらゆる辛酸を経て悟道に徹底した人、明敏かつ綿密に禅の活機用を現前した人だと解し、逸話・奇行の表面だけを見て、単に奇人あるいは洒落の人と解するのは誤りだとしている。著者の意図としては、逸話を童話化することで、「いささかなりともその本質に触れたいと念願した」と述べているが、著者のその思いが実現しているかは疑問である。

この本には、「鼻くそ」(第十二章)というのがあるが、茶席に招かれた良寛が、鼻くそを丸めてこっそり置こうとしたができず、始末に困って元の穴に戻したとか、茶を一度呑み干してから次席の客の存在に気づき、口中の茶を半分ほど茶碗に吐き出したとかいった話が載せられている。これは戦後出た児童用の本では省かれているエピソードである。異常なほど潔癖な現代の子どもたちにとって、これは拒否されて当然な「汚行」であるが、不潔・不衛生だった戦前の子どもでも、はたしてこの奇(愚)行の背後にひそむと称される「本質」を、多少なりとも洞察しえたであろうか。著者は、「良寛さまは、退屈そうに長まったり、鹿爪らしくお辞儀をしたり、道具をほめてお世辞を言ったりすることが大嫌いでしたから」、退屈のあまりそうした所業に及んだとコメントしている。

この逸話を、反権威主義・反形式主義の思想に立脚した反骨の行為と評する論者もいるようだが、著者はさすがに児童読者にそこまでの絵解きは企図していない。ならば、このエピソードで子どもたちに何を理解させようとしたのか。大人にとってはほほ笑ましい、良寛の天衣無縫ぶりも、「社会化」あるいは「形成過程」にある子どもたちにとって、非常識あるいは「わがまま勝手」としか受けとられない可能性が強いであろう。

(2) 戦後における児童読み物

1) 山本和夫 『良寛さま』(偕成社 1958年)

この本では、良寛の出家の理由について、名主見習い役になってから一度も楽しいと思ったことがなく、役人からも町の人からも昼あんどん扱いされていたことをあげている。直接には、泥棒が斬首の刑に処せられた場面に立ち会わされて、その助命を役人に請うたが、一笑に附された上に叱られたのが、動機だということになっている。処刑場での栄蔵と役人とのやりとりは、大変詳細に描出されている。さらに、出雲崎の漁師と役人のあいだの対立を

調停しようとして失敗し、名主は勤まらぬと、出家を決心したという話も添えられている。

良寛が国仙から印可を与えられたのち、寺の住職になることを欲せず、求道者の道を歩み続けたことについては、釈迦が弟子たちに、「私の心を、ついで下さいよ。けっして、お金や、お寺や、たからものを、つぐのではないですよ」と教えたという話を、良寛が国仙から聞いており、寺を継承するよりも師の心を受けつごうとしたのだと説明する。国仙在世中に、父以南の死の報せを聞いて京都に向かった、ということになっている。以南の自死の理由については、尊皇倒幕の志が固かったけれども、幕府の取締りのきびしさのために桂川に投身した、とされる。

越後への帰還のことについては、円通寺を出立するおりは、帰郷して父母の霊を慰めようと思っていたが、高野山で弘法大師に祈りをささげたことで帰郷の念がうすれたとき、吉野山の麓の家に泊めてもらったさいに、その家の主から蔵王権現の花籠（吉野の花がたみ）の話を聞かされ、越後の桜の花を拾おうと決意した、と書かれている。

帰郷した良寛が子どもたちと遊んでいる情景は、もちろん詳細に描き出されている。良寛は、「さあ、おいで、みんなおいで。とうさんや、かあさんのじゃまになってはいけませんよ。いま、おひゃくしょうは、いそがしいのですよ。」と、子どもたちを呼び集めた、というのである。良寛は保父の役割を意識的に果たし、子どもたちが遊びに飽きると、地面に字を書いて教えた、とある。口絵の一枚には、良寛が杖の先で地面に「いろは」を書く傍らに村童が5人集まっている図がある。本文の方の説明では、勉強の嫌いな子がそっぽを向いても良寛は怒らず、勉強の好きな子だけに教えたこと、そういう場面に通じかかった村人は、良寛の後ろ姿にそっと手を合わせて、心の中でお礼を言ったという記述がある。

以上、山本の記述はかなり潤色が多く、読者である児童に納得させるように話を運んでいる。まったく史実を無視している訳ではないが、創作している部分が目立つ。さて、かような努力をしても、良寛の本質としての思想を子どもたちに伝えるのは不可能である。良寛の遊びざまは、子ども以上に子どものみであり、遊びに没入している子どもと共に楽しむものである。とても文字を教える師匠の振る舞いを彼に期待すべくもない。こういうことを書かざるを得なかった山本は、教育的伝記に仕立てようとしている訳である。もっとも、良寛の遊びに保育的意味を持たせたのは山本の創意ではなく、先人の所説を借りたのだと言っている。

本書の解説の中で山本は、「子どもらと手まりつきつつ」の歌の裏には、春の日が暮れなければ、農民の野良仕事が進むのという願いが隠されていたかもしれない、と述べている。

良寛の立派な心がけを私たちが学びたいものだというのが、解説のしめくりになっている。

2) 川上四郎画集『絵本 良寛さ』（理論社 1974年）

川上は戦前から童画の画家として知られており、良寛を敬愛しつづけた。長岡の産であり、中学時代に西郡久吾に教わっている。戦争末期から30年以上湯沢に暮らし、あたかも良寛の

ごとき生活を送った。戦後、東京のデパートで毎年開かれた童画展に、川上は良寛説話をテーマとするミニアチュールを出品しつづけ、その田園調で朴訥な画風に魅きつけられたのが、理論社の社主・小宮山量平であった。小宮山は川上の絵で良寛についての絵本をつくろうと企画を立て、「物語りふうの解説」を自ら書くことにした。

当時川上は病気から回復したとはいえ、すでに80歳をこえる高齢であったが、身も心も傾けて良寛を愛してきた思いで、満3年の歳月をかけて24葉の絵を完成した。この絵を「稀有の良寛像」と小宮山が激賞しているのは、編集者・出版者としてのセールス・トークではない。まさに見事なもので、他の絵本のばあいのようなステロタイプの通俗画ではない。「人間良寛のもっとも親しい印象をくきやか」に描き出したものである。

この悠々たる画業を伴奏する文章を書くべく、小宮山は手に入る限りの研究書や良寛の作品と対座し、1年を費して書きあげた。小宮山は、良寛が子ども向けの本の中で久しくお人好しのイメージで描かれ、子どもと老人だけの天真無欲な心情に似合ったアイドルに造型されてきたことを批判する。子どもと老人に対して天真や無欲を道徳的に押しつけたその分だけ、天真や無欲とは縁のない現世の争闘の中に大方の日本人が呑み込まれているのが、まさに処生の現実ではないか、と言うのである。

良寛をこの世のものと思われぬほどの善人に見立てたり、現世を超脱した風雅や悟道の達人と讃仰する傾向は、現代日本の混濁のすさまじさからの観念的逃避でもあろうが、また一面、富国強兵や経済発展が要請する立身出世型の人間観への抵抗でもあろうことを小宮山は指摘する。

こうして小宮山は、単なる天真無欲な善人モデルとしての良寛を虚像とし、今まさに世界に類例のないほどに人間喪失の地獄図を現出させている日本人に対し、真の人間的な回帰点を切実に指し示している、深く現代的な意義を背負っている人物として良寛を描き出そうとした。良寛逸話で描かれている良寛像が、並外れて心やさしい風変わりな乞食坊主といった通俗化に墮することを批判し、「心耳を澄ませて自然のあしおとを聞く感受性に恵まれた清潔な修業者」、宗派や王侯の支配に縛られぬ自由な心を持ち、わけへだてなく人びとへの真の奉仕をおこなった仏法の行者だったと小宮山は評した。しかし、「解説」の中で記されている小宮山の懐いは、本文の中ではほとんど読みとれず、また、彼の文章はとても一般の子どもに理解できるものではない。「老幼を問わず、……もっと多くの人びと」の開眼を願う、万人のための絵本になってしまったのである。

3) 角田道男「良寛」(小学館 1981年)⁽³⁾

出家の理由としては、代官と漁師とのあいだのもめごとを解決するのにまったく役に立たず、かけひきができなくて、皆をまとめていく力に欠け、「ある日、がまんできないことがおきたので」、光照寺の玄乗に相談し、出家した、と書いている。それは、盗人の斬首に立ち合った件である。

国仙から印可の偈をもらったものの、師の遷化の悲しみの中に旅をしつつ、大きな寺の住職になったからといって立派な僧になったとは言えないし、自分には多くの人の考えをまとめたり指図する力はないと自覚して、その道を求めなかった、としている。

越後への帰国については格別の説明はなく、子どもと遊んでいる良寛は、「とてもたのしそうに見えますが、ときにはとらをえがこうとして、ねこさえもかけなかったかなしみが、心にうかぶことも、あったらうとおもわれます」と著者は書いている。つまり、良寛は完全に自足して日々を安逸に暮らしていた訳ではなく、心中にうっ屈するものがあつたろうことを示唆しているのである。ただし、ここの叙述は、子どもが読んでも理解できないであろう。

鬼ごっこをして藁塚の中に隠れ、日が暮れて子どもたちが帰ったあともそこにじっとしていた話や、子どもたちに柿の実を落としてやろうと木にのぼったのに、自分ばかり柿を取って食べていた話など、良寛奇話の中のエピソードが紹介されているのは、他の本と同様である。「良寛は、子どもと遊んでいると、それにむちゅうになってしまい」、こうした失敗を時どきやったというコメントがつけられている。われわれはこうした良寛の奇行や愚行を、良寛の人間味として愛し、親近感を覚えるのであるが、子どもたちにとってはどうだろうか。この種のタイプは、いまの学校ではのろまで鈍な子どもとして、いじめの対象となっているだろう。

4) 小俣万次郎 『良寛』 (ポプラ社 1985年) ⁽⁴⁾

良寛の出家の理由については、名主見習役としての評判が良くなく、だれにでもやさしくすることが町民の気に入らなかったこと、出雲崎の漁師と代官とのあいだの争いごとを解決できなかったことで、嘘が言えない自分にはとても名主の役は勤まらなかつたと考えたからだ、としている。また、出家したいというのはかねてからの願望だった、とも書いている。光照寺の玄乗和尚とのやりとりを詳述しているのは、山本のばあいと同様である。また、母親の許しを得て寺に入ったとしているのも同じである。

国仙の印可のことは書かれてなく、国仙が良寛をたいそうかわいがり、良寛のことをほめていたことが記されている。国仙は良寛をどこか立派な寺の住職にしてやろうと思っていたが、良寛はそれを望まず、釈迦の生き方にならって、「すこしでも、ほとけのみにち、ちかづきたい」と答えて、国仙を感心させた、としている。

越後への帰郷については何も説明がない。子どもたちとの遊戯については、じゃんけんをして順番でまりをつくというルールも忘れて、「ひとりでいいきになって」まりつきをする良寛が描かれている。遊び好き、子ども好きというだけで、保育者でも教師でもない。著者の小俣については、豊島師範の出身で学習院初等科の教諭、社会科が専門という紹介があるが、この書物にはあまり教育的粉飾はみられない。

解説を担当した、教育史学者の唐沢富太郎は、良寛について、「鍛えられ練り上げられた

ような底光り」、「子どもを無上の友とし」、「自然を愛した」、「超越的、脱俗的で童心と善意にあふれた」、「無為無欲、清貧に甘んじ」た孤高の人だと評している。児童の教育や社会化については、説教や訓戒をおこなうことなく、日常の行為の中から自然に即して、生活の中で教化を行ったと説明する。小俣は、ほぼこの線で良寛像を描いている。

5) 荻野有司『良寛さま』（につけん教育出版社 1997年）⁽⁶⁾

良寛の出家については、出雲崎の代官と町の人たちとの争いに際して、口下手のために役立たずと非難され、栄蔵は自信を失い、自己嫌悪に陥ったことと、もっと勉強したいと思って、光照寺に「逃げこん」でしまったと書いている。玄乗は栄蔵が寺に住むことを許し、父以南はたびたび寺を訪れて栄蔵の翻意を促したが、彼の決心は固く、ついに断念した、という事になっている。

良寛は国仙から「おぼうさんのくらいと、手づくりの一本のつえをいただき」、国仙没後5年間にわたって修業の旅を続けたのち、故郷の越後に帰った、としている。良寛は、きびしい修業やむずかしい学問を修めた人だから、大きな寺の和尚さんになってもいいのに、「どうしたことがいくらすすめられても『うん。』といわず」、山の中の小さな五合庵で独居した、と書いている。

子どもとの遊びでは、まりつきに夢中になって順番を譲らず、いつまでもつき続けたとか、おはじきで勝ち続けて手に入れた煎り豆を子どもたちに分けてやったとか、例の藁塚の話などが紹介されている。そして、良寛が小さい子どもたちと遊んでやったのは、忙しい母親にかまってもらえない子どもたちのめんどろをみてやって、百姓たちを少しでも助けたいという気持ちがあったからだ、と、保育者説をとっている。著者は新潟県新発田町の出身で、新潟の中学校、東京の私立小学校で教職にあった人である。

3. 良寛と子どもの遊戯についての諸家の所説

良寛についての最初の本格的な研究書として有名な、西郡久吾の『北越偉人 沙門良寛全伝』では、「第3章 良寛出家の動機並逸事」の中に、良寛と子どもたちとの交遊のことが語られている。禅師の三好として、童男女・手まり・はじきの三つがあげられ、「小児は天真爛漫にして其詐らざるを愛するなり」とコメントしている。手まり・はじきについては、「箇中趣味人相問、一二三四五六と、奇僧の奇癖といふ可し」として、とくに深い意味を見いだしてはいない。

また、良寛に揮毫を頼んでも容易に応じてくれなかったが、子どもに話して、手まりやはじきの貝殻を贈って頼めば、「喜色満面」ただちに書いたという逸話を伝えている。いたる所で群児を集めて遊戯し、いつも愚弄・嘲罵を受けたが気にせず、ある時隠れ鬼の遊びをしているときに良寛が鬼になり、子どもたちは良寛に告げないまま帰ってしまったが、翌日来ると良寛は依然瞑目して同じ場所に立っていた、という有名な話書いてある。「嬉遊の細

行だに尚不欺・不妄の至誠を見る」というのが西郡の評であるが、信じがたい愚行である。これでは昼夜の区別も、時間の感覚も欠いた非常識でしかない。しかるに実際の良寛は、戒語で見るように、細かいところまで神経のいき届いた、常識人であった。

それに、ここに描かれた子どもたちは、「天真爛漫にして詐らざる」といった純真無垢な連中ではない。良寛をバカにし、からかって楽しむ狂童たちである。良寛は、子どもたちを楽しませるために、翌日までじっと佇立していたのか。はたまた不欺・不妄の道德を身を以て教えるために、耐え忍んだのか。子どもたちとはじきをして大勝を博し、賭物の煎り豆をたくさん手に入れたのを行人が見て、良寛の巧技を賞美したところ、良寛はひどく恥ずかしがり、豆を膝下に隠したというエピソードについては、「奇人の奇癖、箇中の趣味、凡物の解す可からざるものか」が西郡の評である。

良寛をさして「北越偉人」と称し、良寛についてのさまざまな俗伝に対し、「奇人を奇異ならしめんとて却て本色を暗昧ならしめ」ることを警告した西郡であるのに、「子ども好き」の、「子どものような」良寛像については、讃辞を贈ってやまない。良寛が道元の『正法眼蔵』の中から「愛語」を引いて書写したことについて、西郡は「師の教化上の思慮」周到なりとし、また、これを敷えんした「戒語」について、「卑近にして俚耳に入り易く、三蔵五車の經文よりも実践躬行の上に於て大裨益あり」と述べている。読者がよく反省して終身履行することを勧めるのである。

『沙門良寛全伝』の自序で、当世の物質文明の発達、神霊界の遅滞、否、後退、風俗人心の頹廃を憂える木村周作が、警世のために良寛の著作を編集・公刊すべきだと提案したことが執筆の由来だと、西郡は書いている。「教育の末斑に従事」する人間として、西郡は良寛について「諸越のひしりの説きし人の道 朝に日にけにきはめし大人は」と詠んで、彼を『論語』の愛読者・実践者として讃えている。学・庸・魯・論中から良寛が抜粋した諸遺墨は、自省のためのものか、他から依頼されて書いたものかはともかく、良寛が儒教的常識の持ち主であることを示すものであろう。能登屋周蔵の勘当赦免のさいの書簡や、周蔵帰宅のさいの振る舞いから察すれば、良寛はまさしく常識の人である。

戦後における良寛研究の中で、不滅の金字塔と称すべきものは、唐木順三の『良寛』である。⁽⁶⁾ 唐木はこの書物の「あとがき」で、道元では「只管打坐」となるところが、良寛では「只管手毬」となったと書いている。良寛の子どもと遊ぶ歌、手毬の歌について、良寛の心がおのづから流露していると評し、良寛が好み愛したのは子どもの世界、あるいは子どものように無邪気な心情であった、とする。良寛の「遊」とは、「時がおのづからに時を転じゆく世界」であり、騰々天真・悠々随縁・従容・等閑等の世界は、禅僧たちの言う「遊戯」・「遊戯三昧」・「遊化」だというのである。これが、「青陽二月初」の結句でいう「箇中意」の内実であり、「毬子」の結句で「一二三四五六七」と記されているものだと、唐木は説明する。

われわれは日常、社会・倫理・習慣・名利・煩惱などに自縄自縛または無縄自縛されてい

るが、それらを超越したものが「遊」だと、唐木は言う。子どもたちはほんらい無邪気で「莫妄想」であり、すべてを遊戯にしてしまう。良寛は、動く心のままに子どもたちの中に入ってゆき、子どもになりきり、「ひふみよいむな」の莫妄想自体の中に没している（或いは妄想の有無以前のところで遊んでいる）、というのが唐木の説明である。良寛の遊戯を、童心に還っての無邪気な振る舞いと、その天真爛漫ぶりを称えるだけでなく、それが禅定三昧の境地に到っていたことを指摘するのである。

加藤信一は書道の専門家であり、新潟大学の教授として、書道教育の研究や教育に当たった人物である。⁽⁷⁾良寛研究者としての加藤の本領は、良寛の書についての探究であり、事実彼はこのテーマで多くの業績を世に送っている。しかし、教育の分野で仕事をしてきた人間として、加藤は良寛の教育者としての側面に注目する。彼は、良寛を教育者として真正面からとらえた最初の人物として、小原国芳の名をあげ、良寛にかかわる小原の知遇に深く感謝している。玉川大学の関係者である鎌倉芳太郎を新潟大学の非常勤講師として迎えたことが縁で、加藤は小原が良寛をかねて敬愛していたことを知り、小原と知りあうようになったのである。

加藤によれば、小原は、「良寛さんの心を持つことは、先生になる資格のひとつだ」、「いやしくも教育者たるものは、もっと良寛に学ばなくてははいけない」などと座談会で語ったり、また、「幼稚園教育の理論や方法ではフレーベルが世界一だろうが、魂はむしろ日本の良寛さんだ」と書いていた。「良寛さんのいい伝記が欲しい」、「加藤さんにぜひ」書いてもらいたいという小原の要請に応える心算で、加藤は良寛の伝記を書きあげたのであった。加藤は、良寛がまさに子どもになりきっていたこと、ペスタロッチの墓標にあるような、「すべてを他人の為に、おのれには無」の生涯を通したという点で、良寛は偉大な教育者といえるであろうと述べている。

加藤は、『良寛禅師奇話』などに描かれている、良寛と子どもたちとの交遊にかかわるエピソードを紹介し、「まことに童心そのもの」だと述べ、また、良寛の詩歌や相馬御風の叙述を引用して、良寛がいかにか子どもたちに慕われたかを指摘する。手毬について、フレーベルが第一恩物として球の教育的価値を強調したことを参照すれば、良寛は「世界的な教育者」なのだと加藤は述べている。毬をつくることによって、子どもたちはリズム感・集中力・持続力・運動能力などを養ったのであり、良寛はそれをさらに禅の修行にまで結びつけていたようだというのである。「一、二、三、四、五、六、七」というのは禅の数息観とも関係があるらしく、呼吸を整え、悟りの境地へと修行を深めていくことで、毬つきは坐禅と同じ意味があったのであろうかと、加藤は述べている。

良寛の「教育」について、加藤は良寛をめぐる、馬之助への無言の訓戒、藩主内藤侯への和歌による諷諫、床屋長造への意趣返しなどのエピソードをとりあげて、それに短いコメントを附している。ガミガミと怒れば相手は反抗的になるだけだから、本人の身を案じ、将来

を思うまごころと慈愛が人を打つのだと言う。「こういう教育は、ストライキや闘争をくり返す人には不可能であろう」というコメントは、理解できなくもないが、加藤のイデオロギーの表白であろう。村上藩主への諫言については、お咎めを受けるおそれもある「きわどい話」で、「良寛も偉いが藩侯も偉いものだ」と、二人の当事者を両ばめしている。長造へのからかいについては、「良寛がこんな意地悪をしたかどうかわからぬが、良寛が人をこらしめることといえば、せいぜいこの程度の、誰をも傷つけない、ユーモアのある仕方だったのである」とコメントする。

若者や殿様や庶民に対する良寛の「教育」は、教師らしい説教・訓戒の範疇に属するものでなかったことについて、加藤はそれを良寛の人格・人柄に帰していると言えるであろう。こういう捉え方は、相馬御風流のものであり、事実、加藤は、良寛の伝記は相馬御風につきるという小原の見解に同調している。加藤の見る良寛像は、「自我を捨てた無欲な人、純粋で正直で人を疑うことを知らない人、愛情が豊かで思いやりがあり感謝の心を持っていた人。……最も日本人らしい日本人だった人。独処草庵、終生粗食の修行を貫いた人」ということになる。ただし、良寛はあまりに大きすぎ、言葉をいくら並べても肉迫することができない、ともしている。良寛の「奇話」から、彼の人格の偉大を説明することは無理であり、加藤は水上勉のひそみに倣って、「未曾有の人といって逃げる」以外なかったのである。

仏教の研究者のばあいは、良寛理解には徹底したものがあり、良寛の深層（真相）に迫るものがあるように思われる。竹村牧男は、例の馬之助に対する無言の訓戒について、馬之助の至らなさも、自己の至らなさも、等しく悲しいものとして、良寛は落涙したのだと説明する。⁽⁸⁾良寛の詩には、暗夜涙する良寛がしばしば描かれているが、それは無明・煩惱が跳梁する現実への深いしみ・悲しみの涙であり、また同時にそれらが自己の内にも除きがたく潜むことへの悲しみ・嘆きではなかったろうかというのである。かくして、日常の行持における正念相続のためには、道元の言うところの「諸悪莫作」が練り上げられねばならず、生涯をつうじて懺悔と自戒の生活を耕やしていかなければならなかったと、竹村は解説する。⁽⁸⁾

こうした見方からすれば、良寛が教えを説いたり、法を宣べたりすることがないのは、無限に自己を掘り下げ、見つめていく誠実な自己反省があったのだ、ということになる。良寛の自戒・内省は、「戒語」として表出され、それは仮借のない、精緻なものだと評されている。世間の非を見ず、自己の非を見つめる道者の実存が、戒語の中に現成されている。自己自身の過ちを見つめ、不善心を除いていく懺悔によって非本来的な自己を否定することは、本来の自己に帰依することであり、本来的な自己が自己を実現すること、つまり絶対の自己肯定に他ならない、というのである。

良寛がことさらな教化を自覚的に排し、空しいことばによる説法を避けつつも、真の道人として行持し、清浄な自性を露現して他者と交わることにより、接化の功を遂げていたことを牧村は指摘する。⁽⁹⁾『奇話』にいわゆる「道義の人を化する」働きであり、加藤惺一の言

うところの「人格的感化」である。しかし、牧村はそれが教育的動機に発するものではなく、衆生済度の願行へ的大悲に根ざしたものとする。他を教化しようとするはからいを莫作した、民衆との融合によって、人びとの魂を強くうった、というのである。良寛が子どもらと遊戯したことについて、牧村はなんら觸れるところがない。しかし、ひたすらなる自戒と遊戯三昧の二面性の逆説的統一という牧村の説明は、「箇中意」の表出におそらく成功しているであろう。

4. 良寛と子どもの遊戯についての北川省一の所説

良寛の行状の中でもっとも有名なのは、子どもたちとの遊戯である。人びとが良寛の名を知るのは、絵本や童話、大人たちの物語をつうじて、「子ども好きの、やさしいお坊さん」としてであろう。北川省一は、良寛が子どもたちと夢中になって遊んでいる姿を思い浮かべてみるのが最高に楽しい、と記している。⁽¹⁰⁾ 北川自身、孫の二人を老妻と共に育てたことがある。また子どもたちのために図書館でお話の会を長年開いていた。子どもたちと共に学び、かつ遊ぼうとしたのである。⁽¹¹⁾ 一部の人びとから「今良寛」と称ばれたゆえんである。

北川は、良寛帰郷直後には托鉢行のさい、子どもたちから乞食坊主としてバカにされ、からかわれていたが、やがて休戦となり、和解となった、と書いている。⁽¹²⁾ 子どもたちと遊ぶことは、やがて彼の最大の喜びとなり、生きがいとなった。病んで草庵に寝ていても、夢は山野を駆け、街では子どもたちが待っていることをしきりに思うのであった。⁽¹³⁾ 良寛は、子どもの天真をこよなく愛し、「こしゃくなる」子どもは嫌いだった。子どもが楽しむことが、自分の喜びであった。「両楽」を求めて、良寛は遊戯三昧に耽ったのである。

良寛自身が大きな子ども、つまり純一無垢な魂の持ち主だったので、遊びに夢中になれば、無心に没入しえたのだ、と北川は書いている。遊びそれ自体が目的であり、教化のためなどではなかった、と北川は言う。そもそも、何か目的を持って遊ぶならば、もうそれは遊びではないからである。良寛は子どもたちに仏さまの話などしなかったろう、というのである。

⁽¹⁴⁾ もちろん、良寛がそこにいるだけで皆の気持ちが和んでくるといふ、人柄による教化、すなわち「接化」の力は、相手が子どもであるだけ、ことのほか強いものがあつたろう。幼児教育にとっては、そのことがもっとも大切だと思われる。宗教系の幼稚園で、礼拝などの宗教的行事をひんばんにおこなうところがある。子どもたちにはほとんど理解できない呪文を唱えさせるところも多い。聖職者というのは教化に熱心なあまり、相手の心理や能力を無視して法を説きたがる傾向がある。⁽¹⁵⁾

良寛は説教をしなかった。説教する良寛というのは、彼のイメージにそぐわない。一寺の住職となり、葬祭を司るような立場では、説法をしないわけにもいかないだろう。それが嫌だからこそ、良寛は保社を脱し、一瓶一鉢の乞食行を選んだのである。⁽¹⁶⁾ 釈氏が「頭を聚めて大語を打」し、田野の軀を欺いていることを痛烈に批判し、「ことばの多き」ことを戒

めた良寛である。⁽¹⁷⁾ 最も親愛していた弟、由之の妻から息子の不行跡を戒めてくれと懇願されても、ひとこともそれが言えず、ただ涙をこぼすしかなかった良寛である。

北川は、子どもたちとの遊びについての良寛の詩歌が数多くあるのに、子どもの教育についての歌が三つしかないことを指摘している。「人の身はならはしものぞ 子どもらをよく教へてよねぎらひまして」ほかであり、北川はこれらについて、傾聴すべきもの、と評している。⁽¹⁸⁾ 人を善くするのも悪くするのも学習（教育）いかんだという、教育の尊重、その教育は強制であってはならず、子どもへのいたわり・ねぎらいが必要だという教育観が表出されており、これにこそ良寛の独自性、体験からきた滋味がある、というのである。これが良寛の児童教育論の帰結であり、「私達はこれに何かつけ加えるものがあるのか」とさえ讃嘆している。

良寛は「ねぎらひまして」・「さきくいまして」と、大人たちに向かって懇請祈念するだけで、子どものがわに立って大人たちに訴えていたことを、これらの和歌は示している、というのである。たしかに、われわれの教育論は、子どもたちにどう教え、彼らをどう扱うべきかについて大人たちに教説しようとするスタイルになりがちである。子どもは客体にすぎず、子どもの立場に立っていないものが多い。子どもへの愛こそが、すべての教育の根底をなすものであることを、多くの教育論者が説いてきた。しかし、それらは近代の教育思想である。封建社会に生きていた良寛が、弱者・被抑圧者としての子どもの側に立っているのは、注目すべきことである。

ここで北川が、ニーチェの『ツァラトゥストラ』に言及して、山中10年の沈潜のあと、ツァラトゥストラが小児に新生・変身する話を引いているのは、唐突でもなければ、こじつけでもない。⁽¹⁹⁾ 駱駝から獅子へ、獅子から小児へと、精神が三段階に変態することによって人間は覚者となる。ツァラトゥストラは、小児は天真爛漫であり、新しい発端（最初の運動）であり、創造的遊戯者である、と説いている。それは良寛の児童・遊戯観に通ずるところか、相似だと北川はみるのである。これは偶然の暗合ではなく、ニーチェにおける初期仏典の考究と東洋思想への傾斜、ゾロアスター教の東漸と中国の禅への影響といった、東西の思想交流の一結実ではないかというのが北川の予感である。良寛とニーチェの間に同一性ないし類似性を見出だそうとするのは、もちろん北川の教養が和洋に亘っていた故のことであるが、あながち突飛な連想と評すべきではないであろう。北川は良寛の思想が近代を先取りしていると見立てる。しかし、その反近代性においてこそ良寛とニーチェには共有するものがある、と言うべきであろう。

良寛と貞心尼の出あい話には、手まりが出てくる。貞心尼が良寛に手まりを添えて歌を贈ったのだが、この時二人は相見てはいない。「これぞこのほとけの道に遊びつゝ つくや尽きせぬみのりなるらむ」という、ひどくまじめくさった問いかけに、良寛は、「つきてみよ ひふみよいむなやここのとを とをとおさめてまた始まるを」と返している。⁽²⁰⁾ 北川の

解釈では、抹香くさいはからいや思惑などまったく無く、遊びに没頭しているだけだが、あなたも自分でやってみれば、この遊びの楽しさはよくわかるでしょうと良寛は言ったのだとする。⁽²¹⁾ 宗教問答などとっくに超越した、「物外の人」になっていたのだというのである。

しかし、仏道に精しい識者は、良寛の返歌により深い意味を付与しようとする。仏法の有無は観念・理屈の次元では捉ええぬものであり、各自が自分の体験から割り出して確信する以外に方法はないので、まず「つく」と行動を起こすことを勧めたのだ、というのである。⁽²²⁾

また、一から十まで数え、再び一に戻って繰り返すというのは、座禅のさいの「数息観」を想起させるものであり、「手まりをつくのは座禅と同じく、精神を集中する修業で、全宇宙と一つになろうとする」営為だったと説く。良寛は手まりのリズムから、法悦ともいえるべきものを感じとって楽しんでいたのではなかったか、と推測している。

北川は、もちろんこういった深遠な解釈の存在を知らなかったわけではない。彼は、むしろ「俗人」としての立場から、事柄を単純に捉え、良寛を遊戯三昧の人と見立てたのである。もっとも、その遊戯三昧について、莊子やニーチェと照合させて理解を深めようとしていることは前述のとおりである。

良寛の「青陽二月初」に始まる長詩には、托鉢に出て子どもたちにつかまり、百草を闘わせたり毬を打って、時間が経つのを忘れたという描写が出てくる。⁽²³⁾ その末尾で、行人が良寛に「なぜ、このようなことをするのですか」と問うたのに対し、良寛は頭を下げるだけで答えられない。ことばで説明しようもないからである。事柄の本質を知りたいということであれば、その事それ自体と言うしかない。——ざっと、こんなふうに書かれている。北川は、「ご覧の通りの始末」としか答えようがない、と記述する。⁽²⁴⁾

宗教的解釈者のひとりである竹村牧男は、良寛が無垢・無邪気な子どもたちを理屈なしに好きだったのだろうとしつつも、大乘仏教では、子どもを仏になる前の菩薩に喩え、求道の主体として描いていることを述べて、仏教では子どもというものが深い象徴的な意味を持つ存在だ、と言う。良寛がそんなことを意識して子どもたちと遊んだわけではないとしても、その遊びは「出世間」ということの象徴であり、自由にして、また、深い大悲心に裏づけられた、意味深いものだとするのである。⁽²⁵⁾

北川の読みはそれほど深遠なものではないが、かれは良寛が子どもたちに遊んでやるという意識もなく、自ら遊びたいが故に、子どもたちと一体になって遊んだことを指摘して、現在の親も教師も、子どもたちとその心奥の波長と振幅を同じくして遊び興じるべきだ、と提言する。⁽²⁶⁾ たしかに、ほとんどのばあい教師は遊ばせる人であり、自ら遊び、遊びを楽しむ人ではない。教師としての自意識がつよく、責任感にとらわれ、あそびの設計者であり、演出者であるという枠にとらわれてしまう。そのために、子どもたちの遊び仲間にはなれず、同輩としての共感を持ちえない。

良寛が天性まっ正直な、童心の持ち主だったこと、遊びが好きな人物だったことは、衆目の視るところである。しかし、年長じ、中年になってから子どもたちと遊びに興じたのは、どういう訳か。単に、児童期の楽しい思い出の蘇り、あるいは児童期への後退ではなかったろう。北川は、良寛の『法華讃』中、「常不輕菩薩品」に付した偈、「謗法之罪正如此」を引用し、20年前の「泣尽血流無用処」という、血涙の辛酸と精進が無意味、否、謗法でしかなかったという痛恨の思いと、大法逢着の至幸の歓喜との中で、「逍遙として物外の人」すなわち「遊ぶ子ども」となることができたのだ、と説明している。⁽²⁷⁾ ほんらいの我の発見であり、その肯定であったとしても、それは20年にわたる苦しい修業と、そこでのとらわれからの自己解放だったということであろう。

もっとも北川は、良寛の遊戯性は苦辛精進の果ての悟達としてのものの他に、彼天性の小児性として、「頻々たる創造的衝動とものぐさ」が腹合わせに併存していた、とも指摘している。⁽²⁸⁾ 良寛の詩にしばしば出てくる「懶」に注目し、ものぐさこそは動物と、遊ぶ子ども、すなわち人間本来と根元に繋がる「自然」だ、というのである。このことを説明するために、動物学者のコンラート・ローレンツや、例によってニーチェの「怠け者」まで引照するのであるが、こういう博識に拠る解説はいかがなものであろうか。少年時代の栄蔵が、親の目を盗んでまで読書に熱中し、円通寺では朋輩の誰よりも熱心に修業に励み、帰国後も托鉢行脚に日々従事した勤勉さは、決して懶などというものではない。⁽²⁹⁾ 詩の懶とは自卑であり、真理に到達するまでに長い歳月を要した自己の迂鈍に対する自覚であろう。国上本覚院における俱舍論講釈の中断も、酒や踊りに「興尽くれば辞せず」して去ったというのも、「倦怠」というより、内側から湧き出てくる必然によって行動し、それが消滅すればこだわらずにやめるという自在さを表わしている。伝記作者は、この行動様式を「皆偶然に之を作すのみ」と見立て、北川は「全く周囲を顧慮しない」小児性——もちろん、肯定的な意味で——と批評した。⁽³⁰⁾ 良寛の行動は、世人の常識からは逸脱していたろうが、それは小児の自己中心性とは違って、自己の内面の声に忠実な、自己本然を生きようとする誠実さだったと言わべきである。

〈注〉

- (1) 良寛についての児童読み物としては、本稿でとりあげたものの他に下記がある。吉田絃二郎『良寛』（ポプラ社、1967年）、原田勘平『良寛さま』（分水町教育委員会、1970年）、関英雄『りょうかん』（小峰書店、1972年）、宮脇紀雄『りょうかんさま』（金の星社、1974年）、相馬御風『良寛さま』（有峰書店、1977年）、相馬御風『良寛さまの童謡と歌』（有峰書店、1977年）、西沢正太郎『一茶と良寛』（学灯社、1979年）、鶴見正夫『良寛』（講談社、1980年）、牧原辰『雪国の手まり歌』（講談社、1982年）、柳井道弘『良寛一人の世を超えて人の世に生きた高深の僧』（新学社、1991年）。本稿ではスペースの関係で、ごく一部をとりあげるにとどめざるをえなかった。
- (2) 1929年、雑誌『宇宙』に連載されたものまとめて一本とし、他の童話も加えた。著者は島木赤彦の門人で「アララギ」系の歌人。処女作が『小説・雲水良寛』（春秋社、1922年）で、他に『良寛の生涯とその歌』（古今書院、1939年）がある（助川信彦『大坪草二郎—その歌と酒』刀水書房、1988年）。

- (3) 「国際版少年少女世界伝記全集12」で、良寛とガリレオが収められている。
- (4) 「子どもの伝記全集17」として刊行された。
- (5) 「につけん愛の伝記物語シリーズ①」、小野忠男監修である。
- (6) 唐木順三『日本詩人選20 良寛』筑摩書房、1971年。
- (7) 加藤信一『良寛 日本人のこころ』玉川選書、1978年。なお、加藤信一「教育の魂」(宮終二他『良寛の世界』大修館書店、1980年)。
- (8) 竹村牧男『良寛の詩と道元禅』大蔵出版、1978年、153ページ。
- (9) 同上、143～52ページ。
- (10) 北川省一『良寛游戲』アディン書房、1977年、188ページ。
- (11) 北川省一『永遠の人 良寛』考古堂、1994年、65、98ページ。
- (12) 前掲、『良寛游戲』106ページ。
- (13) 「独臥草庵裡 終日無人視」の詩(東郷豊治『良寛詩集』創元社、1962年、64ページ)。
- (14) 前掲、『良寛游戲』202ページ。
- (15) 宗教教育に熱心な人びとの中には、「たとえ幼児のときにはよく理解できなくても、成長したとき、かつて耳にし、口にしていたものが甦ってきて、求道・求法の動機となる」と論じる者がある。また、みずからの幼児体験に即してそのことを立証する人たちもいる。しかし、そんな先入見よりも教師の接化の方が、人間形成上はるかに有益で効果的ではないかと思われる。
- (16) 「高野道中買衣無直銭」の詩、「一瓶一鉢不辭遠」(前掲、『良寛詩集』354～5ページ)。
- (17) 「僧伽」の詩、「落髮為僧伽 乞食聊養素」(前掲、『良寛詩集』159～64ページ)。
- (18) 前掲、『良寛游戲』206ページ。
- (19) 同上、207～11ページ。
- (20) 竹村牧男は、「手まりをつく只中に仏道があり、それは無尽の法の開演である」と貞心尼が迫ったのに対して、良寛が「頭による理解ではなく、身体による習練の中に行ってみよ」と教えたのだと解している(竹村牧男『日本人のこころの原点 良寛』広済堂、1994年、141～2ページ)。
- (21) 北川省一『良寛と子どもたち』現代企画室、1988年、123～4ページ。
- (22) 長谷川洋三『良寛禅師の真実相』名著刊行会、1992年、220～3ページ。
- (23) 「青陽二月初 物色稍新鮮」(前掲、『良寛詩集』13～5ページ)。
- (24) 前掲、『良寛と子どもたち』128ページ。
- (25) 前掲、『日本人のこころの原点 良寛』89～92ページ。
- (26) 前掲、『良寛と子どもたち』130ページ。
- (27) 前掲、『良寛游戲』144～6ページ。北川省一『良寛、法華経を説く』恒文社、1985年、210～1ページ。同『良寛、法華聖への道』現代企画室、1989年、179～80ページ。
- (28) 前掲、『良寛游戲』202～4ページ。
- (29) 石田吉貞『良寛—その全貌と原像』塙書房、1975年、105～12ページ。
- (30) 北川省一『越州沙門良寛』恒文社、1984年、222～6ページ。

〈読者へのおおびとお願い〉

紙幅の制約のため、尻切れに終わっていることを深謝する。篤志の読者は下記の拙稿を併読していただければ幸甚である。「自性清浄補遺——良寛と子どもたち」(『大学改革と生涯学習』第5号、山梨学院大学生涯学習センター、2001年3月)。

